

講座② 浮世絵の魅力

| | |
|---|-------------------------------------|
| 第1講義 | 風俗画から浮世絵へ～浮世絵の成立～ |
| <p>第一回は、いかにして「浮世絵」が生まれたか、という歴史的経緯をたどります。「浮世絵」とは文字通り、「浮世」（世の中のさま、風俗）を描いた絵画ですが、日本美術では古来、風俗（浮世）は絵画の主要モチーフではありませんでした。ではいかにして風俗が主モチーフになったのか、そして浮世絵が生まれたのか、について語ります。</p> | |
| 第2講義 | 江戸時代の「メディア」浮世絵～浮世絵の機能に着目して～ |
| <p>浮世絵版画は、江戸時代における「メディア」（媒体）でした。版画は、大量複製、大量頒布が可能なものです。そして浮世絵版画は、それまでの日本における美術の「受容」のあり方を大きく変えた、「店先で購入する絵画」でした。流行りのファッションや人気演目の衣装に身を包んだ女性や俳優などのプロマイド（グラビア）、観光ガイドブック、そして幕末以降は文字通りのメディア（情報発信）としても機能しました。第二回はメディアとしての浮世絵版画について語ります。</p> | |
| 第3講義 | 蔦屋重三郎と黄金期の浮世絵～歌麿、写楽～ |
| <p>2025年の大河ドラマ「べらぼう～蔦屋栄華夢断(つたじゅうえいがのゆめばなし)～」は、江戸時代の中頃（18世紀後半）を主な活躍期とした版元・蔦屋重三郎（1750-97）を主人公にしたものです。略称が「蔦重」。数多くの戯作本を世に送る一方、浮世絵版画の版元として喜多川歌麿（1753-1806）や東洲斎写楽（生没年不詳）などの絵師を育て、その作品をプロデュースしています。歌麿や写楽の存在によって、彼らが活躍した寛政年間は今も浮世絵の黄金期とされています。第三回は、蔦屋重三郎と彼がプロデュースした2人の浮世絵師についてお話しします。</p> | |
| 第4講義 | 浮世絵の華・美人画～春信、清長、歌麿、英泉、そして近代～ |
| <p>第四回は、美人画についてお話しします。浮世絵版画の主要なテーマは、役者絵と美人画でした。美人画を得意とした浮世絵師たちを時代に沿って列挙していくことで、ほぼ浮世絵の流れ、になってしまうほどです。どれも同じように見えてしまうかもしれませんが、ここで挙げた美人画描きたちの顔貌表現を仔細に観察すると、それぞれに個性があることが認められます。また時期によって大きく変化していくこともわかります。売れっ子美人画絵師が描いた美人画の顔はすなわち、時代が求めた顔、とも言えましょう。</p> | |
| 第5講義 | 観光ガイドブック？～広重の街道絵を読み解く～ |
| <p>19世紀に入って浮世絵の新たなジャンルとして確立したのが「風景画」（名所絵）と「武者絵」でした。歌川広重は、葛飾北斎と共に、浮世絵版画の「風景画」を代表する絵師と言えましょう。広重は、初期の代表作となった「東海道五十三次」（保永堂版）以来、数多くの街道絵シリーズを手掛けました。そこには宿場とその周辺の名産品や名物グルメなども描き込まれ、現代で言うところの観光ガイドブックのようです。第五回は広重の街道絵の魅力についてお話しします。</p> | |
| 第6講義 | 浮世絵、海を渡る～「ジャポニスム」概論～ |
| <p>最終回はジャポニスム（japonisme:仏）と浮世絵についてお話しします。ジャポニスムとは、既に多くの方がご存知の通り、「19世紀後半のヨーロッパ美術に見られる日本趣味」（『日本国語大辞典』小学館）のこと。その中心的な存在が浮世絵版画でした。浮世絵は西欧世界でどのように受けとめられたのでしょうか？浮世絵版画が西洋絵画（特に印象派の画家たちの作品）にどのような影響を与えたのかを、お話しします。</p> | |